

異常な寒冬

冬将軍

厳冬といえば、すぐ登場するのがナポレオンのモスクワ遠征に立ちはだかた自然のモンスター、冬将軍である。一八二年一月から翌年の二月にかけてのヨーロッパの厳しい冬の寒さは尋常ではなく、ベルリンの12月の平均気温が平年より七・九度も低いマイナス七・三度。まさにナポレオンの心胆を凍らせた未曾有の寒さは年を明けても続き、ヨーロッパ各地の1月の平均気温でも5度低く、モスクワに攻め入ったフランス軍は、厳しい寒さの冬将軍の前に敗れ去つたのである。第2次大戦のヒットラーのモスクワ攻略も長雨のぬかるみに自慢の機甲師団も動きがとれず、冬将軍の追い討ちの前に再び敗れ去り、ナポレオンの「の舞となつた。この冬は日本でもこの異常な寒さとなり、文化10年2月9日（陽曆）川々凍る（攝陽奇觀）」という、淀川を凍らせた厳しい冬となつてした。

江戸時代の文化9年末から10年の初めにあたり各地に記録が残つてゐる。江戸でも、厳冬、両国川水あり（武江年表）と寒い。日本海側の鳥取でも、今日より雪頻りに降つて連日止まず、大雪地に積もること6尺余となつた。ついには米子の裏海に繫留された大船が氷詰めで立ち往生となり、その厚さが5尺余りあつたといふ（稀有名珍事 因府年表」と伝えられている由本武夫氏）。この寒さ、諏訪神社に残る500

年にもわたる御身渡りの記録からも伺える。この年の諏訪湖の結水日は12月26日と早い。この異例の早さは50年前に同じ26日という記録があるだけで、以来、明治までない。この年の寒さが100年に一度あるか無いかの異常寒冬であったことがわかる。

一月一千日の大寒から立春までの半月の間が最も寒い時期にあたる。世界一の寒い記録は、南極大陸のボストーク基地における氷点下89・2°C、南半球の冬にあたる1983年7月21日の観測記録である。この極値は一日中太陽がでない暗夜が2か月くらい続いた後にたどり記録であり、南極点に近い標高3488mの大陸氷の上での例外の寒さの記録となる。そこで平地での最低記録はシベリヤ大陸奥地のベルホヤンスクの氷点下67・8がある。1月の平均気温が氷点下46・3°C、まさに酷寒の字がピッタリとする。吐く息が耳もとで凍る時に発する音を、星のささやき、とよんどおり氷点下50°C以下なると聞こえるとシベリヤクーツ人はい。

日本でのこの百年間で最も寒い公式記録は、1902年1月25日、北海道の旭川で観測された氷点下41・2度である。猛烈なシベリヤ寒気が襲来のまゝ只中、気圧の傾きがつかの間緩んで晴れあがる。低温で水蒸氣も少なく、空は冷たく澄んで放射冷却を遮ることなく地面の熱を逃し続ける。盆地のなかが風が止まり15時間も長い夜に厳寒の冷気が重く溜る。日本一の寒さの記録はさらに北の当時気象庁委託の区

内観測所であつた美深びふかの氷点下41・5度がある。同じ1931年1月27日の上音威子府の氷点下41・3度があり、いずれも低い山並みに囲まれた盆地の街で1月末に集中している。

旭川で日本一の寒さが記録され、翌日には帯広で第2位の記録、氷点下38・2°Cが観測され、日本列島が記録的な大寒波にすっぽりと包まれたその真っ只中、八甲田山の悲劇が起こつてした。青森連隊の雪中行軍隊は、雪の八甲田山をめざし寒さと白い魔羅と戦い、一百数十人が死んでしまつた。青森連隊の雪中行軍隊は、雪の八甲田山をめざし寒さと白い魔羅と戦い、一百数十人が死んでしまつた。新田次郎原作の映画「八甲田山」になかに、荒れ狂う吹雪と猛烈な寒さに巻き込まれたドラマが鋭く悲劇的に描かれていた。

そのなかで遭難した雪中行軍隊の一人の兵士が、死を目前にして服をかなぐり捨てて、裸で雪の中に飛び込んで行くシーンがあつた。寒さの話題としてはショッキングだが、凍え死ぬ寸前には人は着てゐる服を自ら脱ぎ捨ててしまつた事がしばしばある。1888年の冬、かつてない猛吹雪に襲われたアメリカでは寒さのため多数の遭難者をだしたが、その多くが衣服を纏つていなかつた。北欧や山岳遭難でも同じような報告が数多くある。

この行動については、今なお謎が多い。凍死した人々は、死の直前に冷えきつた末に燃えるような暑さを感じるものらしい。ふつうは寒さに対して皮膚の下の血管が縮んで守が、死を前にしてその防衛機能が失われ、体の奥深いところ

ろから暖かい血液が大量に流れるようになる。冷えた皮膚は暖まり、快い感じにすらなるらしい。熱の流れは破局的」に大きくなり、焼けるよう熱く感じら衣服を自らかなぐりしてしまう」佐藤方彦氏の著書『穴間と気候』の中にこう述べられている。それは線香花火のあの最後の瞬の輝きにも似ているようにも思える。深い所からの熱の流れ出しは当然のことながら死を加速する。それでもなお「瞬のあいだ命を燃え尽くしてしまった暖かさが戻るのだろう。厳しい寒さも立春まで寒さも底を突く。春一番が吹いて軒先のツララが太りだせて春の足音が聞こえだす。寒過ぎると屋根の雪は溶けず、暖か過ぎると溶けてツララは瘦せる。その微妙な折り返し点が、もう少しでやつてくるだろうか今年の冬は。

季ノハル

雑誌「気象」4年間にわたり気象エッセイをつかいたものです。少々、詳しひきるところもありますが。